

九二一—二三年の國家の豫算額は二百二十萬ペセタに上つた。これに向つて、精神病者、病者、盲啞者及これに類するものが公的保護に數へられる。

縣に於て保護するものは一時的の疾病、自活の能力なき者、兒童、及び、家庭である。これに對し、病院、産院、棄兒院、孤兒院、養老院、不具者收容所が縣經營の範圍に入る。一九二一年に於て縣の社會事業費總て四〇、三百萬ペセタに達す。

都市社會事業の管掌となるものは急病者、災害を蒙りしもの、一時的な保護院、救助所である。かくの如き施設は大都市に行はれつゝある。たとへばマドリッドには福利所 (Casas de Socorro) の數十七に上る。かつ、都市では貧民醫を置き、病者に對して居宅保護を加へて居る。一九二一年に於ける都市社會事業總費二九百萬ペセタに上る。

公的社會事業は内務省の管轄であり、同省の關係上長官の配下に立つ。縣社會事業は七人より十一人の縣代表者によつて監督され、知事これを主宰す。都市社會事業は市長と市會議員の監督にかゝる。

私的社會事業には政府が公的社會事業と見做して取扱ふものと、純然たる私的社會事業とし

て取扱ふものとが區別せられる。何が公的社會事業であるか、何が私的社會事業であるかは内務省の裁量によつて決定せられる。公的貧民事業は婦人の家庭訪問によつて救助の如何を決める定めであるが、それは物質的救助を與へると共に道德的影響を及ぼす方針を採つてゐる。

### 三 公的保健保護

西班牙の公的保健法は一九〇四年に發布せられし衛生法によつて基礎づけられた。一九〇九年には傳染病告知に關する法律が發布せられた。一九二二年二月二十八日の法令によつて保健監督官廳として内務省に保健監督局がつけられた。諮問機關としては保健顧問官、縣及市保健委員會である。公的保健事業豫算は一九二三—四年には五百萬ペセタであつたが、一九二八年には千百萬ペセタに増加した。その結果、死亡率減少し、一九二二年には一千人には二〇・五人なりしもの、一九二八年には一八・四〇人となつた。

肺結核撲滅も勵行されて居る。西班牙に於てこの疾病による死亡率は高く、一九二二年には一萬に付三五・一人の割合である。衛生法發布以來、肺結核告知の義務は定められたが、一九



一四年には法によつて結核撲滅機關が擴張せられ、一九二四年五月四日には王立肺結核撲滅所  
 ができた。この撲滅所は二部に分れ、一は技術部で、一は行政部である。但し、技術部はその  
 後廢止せられて、保健監督局に移された。技術部には科學の適用と監督とに關し、技術的及社  
 會的組織をつくり、行政部は主として經濟的並に財政的側面を擔當する。肺結核保護所 (Caja  
 Pensario) は一九二七年五月十九日以來法の命ずる主要中心に開設せられた。それは經營主體  
 の異なるに従つて、國、縣、都市及私團體の治療所と呼ばれた。これ等の治療所は貧困なる患者  
 並に家族に提供せられる。治療所の設備は待合室、脱衣室、診察室、實驗室、レントゲン室、  
 圖書室、文書室、その他衛生施設を具備するものとせられる。保護所は患者の檢診、患者の隔離  
 その家族の檢診、療養院その他の療養所より退院せし患者の監督、住宅改良に關する衛生的監  
 督、民衆に對する啓蒙を司どる。保護所には二の種類があり、一は上記の機能を行ふもの、一  
 は中央保護所で、ここでは科學的材料を蒐集し且科學的研究を行ふ。前者には二人の肺病専門  
 醫があり、後者にはその他の特殊専門醫がある。そこには有給な看護婦があり、家庭訪問をも  
 なす。その外保護所では療養院より退院せし患者の監督、兒童を殖民として海濱若くは、山地

に送る。一九二四年中かくの如き取扱をなせるもの百二十人であつたが、一九二八年には千二  
 百八十人に増加した。一九二七―八年には三十三の保護所が開設せられ、尙二ヶ所増設の計畫  
 であり、療養院は二十三個所開設の計畫で、既に六ヶ所の開院を見た。その結果は左表の如き  
 結果となつて、死亡率の減小を示して居る。

死亡者數

一九二三年	三四、〇〇〇人
一九二四年	三二、〇〇〇人
一九二五年	二九、〇〇〇人
一九二六年	二七、七四九人

西班牙に於ける肺結核の撲滅は強制的であるが、強制保險制度は未だ導入せられない。

西班牙では花柳病の監督と撲滅とを期して居り、一九一八年の法令によつて常設な縣花柳病  
 委員がをかれることゝなつた。花柳病の取締及監察は保健局常設委員の管掌するところであ  
 る。縣並に市委員は公娼と遊廓とを監察する。花柳病治療所はこの十年以來開始せられマドリ



ツド、サンセバスチアンその他に於ては完備したが、その他一時的なものもあり、不完全なものもある。治療所では主として検査並に治療をなすが、時に娼妓を入所せしめる。その後、男子花柳病患者をも取扱ふことゝなつた。取締にあつては姓名や身分を告げず、單に番號を附することゝなつて居る。併し、この仕組みでは財力あり開業醫にかゝることの能き者をも取扱はねばならぬことが分り、近時この方法は改めらるるにいたつた。花柳病について知識の普及に關する啓蒙運動も行はれて居るが西班牙では國民の間に特に衛生思想が欠けて居る。マドリッドには完備せし治療所があるが、こゝでも花柳病に關する知識の普及を圖つて居り、こゝより全國に啓蒙運動が行はれてゐる。治療所は性に從つて區分し、男子部及女子部となつて居り、診療室には二のベットが備付けられ、検診、手術の後、休養せしむるやうになつて居る。その外、治療所には待合室、書記室、實驗室、レントゲン室が附設せられる。

西班牙では國民一般に飲酒癖なきを以て、禁酒運動や禁酒施設は盛ではない。

#### 四 兒童保護

西班牙の兒童保護は一九〇四年八月十二日の法令によつて基礎を据えたが、該法は一九〇八年六月廿五日より實施された。それに基づき、十歳以下の兒童を保護することゝなつた。尙ほ、これによつて、里子の保護をなし、後見をなし、育兒院棄兒院などの兒童を保護し、遁走兒浮浪兒を監察し、保護教育を與ふることゝなつた。更らに、妊婦にも保護を加へることゝなつたが、一九一〇年の法令によつて、工場及仕事場に於ける母親と兒童とを保護するため國立保護院を設立するにいたつた。これは一九二九年より實施さるべき母親保護法の前衛たるべきものである。西班牙に於て兒童の保護せらるべき範圍は左の五部類である。

第一 兒童保護並に乳兒保健

第二 衛生並に保護教育

第三 乞食及浮浪

第四 保護及保護教育

第五 法 制

これ等の部には最高兒童顧問が配屬するが、この中より執行委員が互選せられ、内務大臣を



議長として委員会が構成される。縣と市ともこの仕組みは繰り返されるが、その場合、縣では知事が議長となり、市では市長が議長となる。最高委員は官吏、特定團體の代表者及専門家と共に會議を開く。不法なる行爲ありたるとき、十六歳以上の兒童は法に問ふこととして居る。一八七八年、一九〇〇年の法令によつて婦人勞働及少年勞働を規正し、委棄兒並びに貧兒の保護をなす。一九〇九年には兩親の禁錮に處せられし兒童を保護する法律が發布せられた。尙、保護年齢を超過せし廿歳以下の少年に對し保護學校が開設せられ、住居と職業のない少年を保護し、乞食たらしめざる仕組で居る。

少年裁判所は一九一八年の法令によつて導入せられ、一九二五年六月十五日より實施せられたが、それは更らに一九二九年二月六日の法令によつて改正せられた。

少年裁判所は既に不良兒の保護が行はるゝ縣並に郡に實施せられた。少年裁判所は一には十六歳以下の少年の教育並に矯正を目的とするが、二には成人より受くる危険を防護するためである。裁判所は三人の委員によつて構成せられる。二人は縣兒童保護委員中より選任せられ、一人は司法大臣の指名にかゝる。委員は兒童の性行を調査し、その犯行を明かにし、更らに、

それにいたるべき一般的な兒童の性行と環境とをも調査する。裁判所の判決によつて公的に處理せられざるものは、その家庭、他の家庭、及び團體に引き渡され、更らに監察に付せられる。この場合、自由なる保護を加へるのであるが、如何にしても改善の見込たゞざるものにしてのみ公私の感化院に收容する。裁判所には訪問保護司 (visitadores) がをかれ、不良兒の家庭訪問をなす。

### 五 不具者保護

西班牙には公的社會事業の外に、私的社會事業も行はれて居り、殊に、宗教團體が私的社會事業を擔當して居る。西班牙では乞食が到るところ横行して居るが、その中には盲人、不具者などがその姿を翳し、哀なれる姿態を呈す。

不具者に對しては單にこれを慈善の對象として保護するのみならず、それに生活能力を付與し、自助の民たらしむべしとする思想が発生し、不具者授産協會なるものが設置せられてゐる。



不具者保護は主として宗教團體の經營に屬し、既に一五三七年、舊教の師父が病者殊に不具者に保護を加へて居り、西班牙に四ヶ所開設されたが一八七五年バルスロナ附近に設置したものが最初のもので、現時まで續き、現に三百二十の兒童を收容しつゝある。それに次ぐものはバレンシア縣に在る不具者保護所である。一九一二年マドリッドに Asilo de San Rafael なる不具者保護所が開設され、最近更らに四ヶ所の不具者保護所が開設せられた。その外、Del Sagrado Corazon de Jesus 尼僧團が三の女子保護所をつくつたが、これは不具者専用のものである。この保護所は模範施設で、マドリッドの郊外にあり、今尙ほ閑靜なる環境を占めて居る。その上、日光も通風もよく、手術を受けたばかりの可憐なる不具者が、靜かにベットに横たはつて、英氣を養つてゐる。保護所は廣き庭園の中にある。一九二八年増築したので、更らに多數の不具者を收容することができるやうになつた。こゝに二百の不具兒が二十六人の尼僧の監督の下に生活しつゝある。この保護所には現代的の設備が施かれ、水も豊富で、電氣で洗ひものをするやうになつて居り、不自由な不具者と雖も容易に持ち運びができるやうになつて居る。寢室は垣に對してのぞみ、豊かに空氣の見舞に任ぜられる。傳染病の兒童に對しては

特別室の設があり手術室、藥局、實驗室、X光線室、その他不具者治療に要する一切の設備が完全になつて居る。更らに、貧困なものには精神の作興をなし、保養をなさしむる。そこには教室と工場とがあり、音樂室には種々の樂器が備へ付けられてゐる。

社會事業に於て後進と思はるる西班牙に於てさへ、不具者保護はこれ程進んで居るが、我國に於ては不具者保護所は東京に一ヶ所あるだけで、我國全體として非人道振りを發揮するかの如くに見ゆる。

## 六 盲人保護

西班牙に於ける盲人保護は國の經營する保護所、學校と、たゞ一縣に病院所屬の不具者保護部が一あるだけで完備の域に達せしを見ない。近時やや改善せられたが、二十の保護所と學校とがあるに過ぎず、職業教育も一般に行はれてゐない。西班牙では未だ盲人は法によつて保護せらるゝにいたらないが、一九二八年三月十五日にいたり、勅令によつて盲人保護所をつくり、教育を加へることとなつた。ここに貧困なる盲人は收容され保護され、教育されるように



なつた。貧困なるにあらざれども、職業教育をうける程の資力なき盲者に對してはそれによする費用を徴收せざることゝした。この保護所は内務大臣の管轄に屬し、その經營と監督とは盲人保護所委員によつて行はれる。盲人にして高齡なるもの、病あるもの、勞働不能なるものは保護所に收容せられ、その配遇者と同棲することも許される。マドリッドには中央盲人保護教育所 (Centro Instructivo y Protector de Ciegos) がある。この保護所では官公に於て處遇せられざる盲人を教育し、その上貧困盲人をも保護する。

参考文献

1. Enciclopepedia Espasa, Barcelona. Hyos de J Espasa. 1925.
2. Enciclopedia Espasa, Tom. VIII.
3. La Beneficencia Publica en Espana. madrid 1922.
4. Asilo de San Rafael, dirigido por los hermanos de san Juan de Dios, Madrid 1924.

5. Estatutos y reglamento oaganico de la Sociedad Instructivo y Protector de Ciegos. Madrid 1927.
6. Annaris Estadistico de Espana. Ano 1927.
7. Annaris Sanitaire International. 1927.



## 第十五章 次の社會の展望

## 一 次の社會の豫測

次の社會に關して何か豫測することができるだらうか。自然科学の範圍では無論多少正確に豫測することも可能である。現代科學の進歩によつて、自然科学者は確實に豫測することができるかと考へ、これを過大に見積る傾きがある。無論現在自然科学の進度に於ても多少豫測することは可能であるが、恐く自然科学者の盲信するが如き程度のもではなく、その可能の範圍は意外に縮小されるかも知れぬ。自然科学と雖も、自然科学者の或者の信ずるが如く決して偉大なる進歩をなせしものでも、嚴密なる意味に於ての精密科學の域に入つたものでもあるまい。全體として、自然科学的研究の成果も未だ低度のもので、自然を征服したなど、誇張して言ひうる程のものではない。

これに對し、社會科學の範圍に於て豫定だの豫測だと言ふことはチト可笑く、社會科學にあつては恐く豫言の權能は全く否認せられるでもあらう。社會科學の研究は決して豫測をゆるすが如き程度の進歩をなして居らぬ。社會科學によつて豫測するのは恰も籤醫の診斷よりも遙かに危険であらう。よつて、社會科學の範圍では一切豫言だ豫測だといふことをしない方が宜いかも知れぬ。但し、人間はこの不完全な資料を以てしても豫言をなし豫測をなす衝動を感ずる動物である。こゝに、次の社會の豫言と言ひ豫測と言つても、畢竟、かくの如き程度以上には出でないことを知る。

經濟生活も亦一定の法則に支配せられると見ることが出来るから、それは一定の方向をとつて走り來り、また、一定の方向へ走り去ると考へることが出来るであらう。これに應じて、過去から現在へ向つての進路を觀察し認識し、また、將來への方向を模索することができるであらう。

現代の經濟生活には無数の要因が入り込み、一々これを指呼することができぬから、確實に進化の方向を決定することは無論できない。いづれにしても、經濟的診斷は頗る曖昧であり、頗る不確實で、かやうな診斷は寧ろ避けた方がよいかも知れぬ。併し、大體、個人主義經濟よ



り集中的經濟への過程は略安全に推測することができるから、その將來への進路も亦略安全に付度し豫想することができよう。前代より現代にかけて、個人主義的經濟と集中的經濟とが兩立し、これが現代經濟生活の特質をつくつて居る。この事は十分明確で、疑ふ要を見ない。それに、個人主義的經濟から集中的經濟に移動しつゝあることも確かで、疑ふことはできないように思はれる。たゞ個人主義的經濟學者の考ふるように個人主義は永久な不變な超時間的な存在でもなければ、社會主義者の妄斷するように資本主義は既に去り、社會主義がそれに代つて現はれたと考ふることはできないだけである。個人主義と社會主義との對立に於て、將來、その一が全く他を克服し、他を亡ぼし去るかどうか、今のところ十分明かでない。たゞ、個人主義經濟だけでは十分でない、集中的經濟がいるといふのが、現代經濟秩序の特徴であり、これが次の社會の形相を定めることは恐らく動かないだらう。こゝに、次の社會の展望が行はれ、やゝ確實に次の社會の形相を定めることができるであらう。

次の社會の何であるやについては、個人主義的經濟の進路を仔細に點檢すれば多少判明するし、又、それに對し推測しうるが如き資料も集積するにいたつた。併し、この資料に基き誤りのない斷定を下しうべしとは何人も保證も期待もしないであらうが、それについて一應科學的な斷定を下し得べきことに就ては何人も異議はないであらう。經濟制度とその進展が頗る複雑なるからには、國民經濟の大觀にあたり、舵のとりようを誤ること或は之れあらん。但し、個人主義經濟と集中的經濟との交渉の性質については或る程度の確實なる分析をいれうるから、現代社會が如何なる性質のもの、將來經濟制度が如何なるものに轉化するかについては多少明白に豫言し豫測することができるはずである。

次の社會の展望は個人主義經濟に對する或る程度の不信認によつて、集中的經濟が諸々の形ちに於て入來することのまわりに行はれるであらう。社會主義が次の社會を形成するかどうか、かくの如き狹義な限定をなすことはできないが、社會主義（社會主義に對して）は導き入れられるやうに思はれる。現代諸國家は既に社會主義を一様に採用しつゝある。

## 二 集中的經濟制度の發展

個人主義的經濟制度の弊害は現代人によつて一般に認識せられ、且つ、痛感せられた。これ



によつて、眼を集中的經濟に轉向したことは事實であるが、個人主義的經濟が集中的經濟によつて驅逐せられたといふやうなことはないし、また、その如く考へるのは早計である。但し、個人主義的自由主義的經濟が現代人によつてその儘保全せられず、社會的原理に眼を轉向しつゝあることについては、如何なる立場、如何なる主義をとるものと雖も、略共通に認識し、然か斷定するであらう。

現代人によつて理解せられ望まじきものとして把捉せられる *wirtschaftlichen Seinsollen* は個人主義的立場にありながら、これと同時に集中的經濟制度を加味するものであらう。これが恐く現代人の把持する *Wunschbild* としての經濟秩序であらう。これに従つて次の社會の形貌も略豫測し付度されるわけである。

現代人は經濟的に何が望ましく、何が價值があると考へるのであらうか。先づ、現代人は個人主義的經濟を弊害ありと認めては居るが、それかといつて、社會主義者達の輕信するように、全く個人主義的立場を見捨てたわけではない。併しこれと同時に、現代人は個人主義的立場のみに低迷することはできないと考へてゐる。ここに、現代社會に始つた特殊の形相があり、

次の社會にいたつて愈その形相を明かにすると考へられる。

現代の經濟生活は個人主義的經濟の無政府狀態に對し、それを組織化して、合理的經濟 *planwirtschaft* となすにある。現代の産業は合理的に形成せられ、技術 (*Technik*) が精練となり、器械の使用多く、所謂器械文明なるものを形づくつてゐる。現代の經濟はたゞ技術によつて運行せらるべく、技術は自然科學の發達と同時に、獨占の狀態より自由に學習することができるようになり、任意に技術者を増加することができるようになった。自然科學が學校で教へられるようになってから、技術は學校や研究所で實驗せられ、合理的に組織的に技術員を養成して、これを産業に排置するやうになつた。現代の經濟は技術が先行するので、技術の發達なくして、現代の經濟を考ふることはできぬ。この意を表示してゴットル氏 (*Gottl*) は *Wirtschaft sei die Ordnung im den Handlung der Bedarfsdeckung, Technik die Ordnung im Volkszuge dieses Handels* と言つて居り、經濟を遂行せんとすれば先づ技術なかるべからず、經濟は技術によつてのみ可能となると言つて居る。ゴットル氏は經濟は社會の要求によつて現はれたものであるが、技術は經濟の要求によつて生れたものだといつ



てゐる。

産業的經營は合理化して、漸次、技術によつて運行する度を進めて行つた。その上、現代の産業は漸次集中し、一の經營は他の經營を併せ、カルテルとなりトラットともなつた。現代の産業は孤立して勝手に競争するものではなく *Gebunden* のもの、彼此結合するものとなり、ここに合理的經濟としての *Planwirtschaft* が導き入れられ、かくて集中的經濟が開始せられた。これに應じて、素より、資本主義經濟は個人主義的自由主義的素地に立つことができず、集中經濟に左右せらるゝこととなり、多くの國民經濟理論家から社會主義化したと言はれ、又、資本主義は亡びつゝあり、社會主義時代が入來すると言はれた。但し、今に於て資本主義が死滅するとは考へられず、集中經濟が導入されても、資本主義は存立し、また、次の社會にも持ち越すと觀測せられるが、社會的原理が資本主義のうちにも導入せられたことは疑ひはない。すなはち、資本主義が衰退して社會主義がその歩を進めつゝあると觀測するよりも、社會的原理が一般に導入確立したと見る方が妥當であり且つ正しいであらう。資本主義も社會化して居り、現代國家の經濟も社會化して居り、社會主義は素より社會化の原則を擴張しつゝあ

る。これによつて、一般に社會的原理社會が入來しつゝあることが分るであらう。たゞ、その特定の形式なる社會主義がすべてを押しやり、獨りその勢威を逞ふして、次の社會たる位置を占得するかどうか分らぬだけである。社會主義の運命は不明であるが、その基く社會的原理の運命は十分明かになり、今に於て何の疑ふところもないように思はれる。現代國家もかくの如き社會的原理化によつて現はれ出た。

こゝに於て、現代の經濟は *Gebunden* のものとなり、遊離し孤立するが如き經濟なるものはありえず、任意に亂雜に孤立して彼此競争するが如き經濟上の無政府状態も漸次その影をひそめつゝある。この形勢は實に明かに看取せられる。資本主義も社會化して居るから、それもこれまでの如き形體のものではなく、そのよつて立つ素地を異にするにいたつた。すなはち、資本主義も亦社會化して社會的原理をいゝにいたり、社會主義者より資本主義は漸進的に社會主義に移轉しつゝあると言はれてゐる。資本主義が社會主義に結合して影響せられたとも考へられるが、それよりも、時代の色調が一般的に社會的だと考ふべきであり、どれもこれも社會化しつゝあると見る方が正しからう。時代が個人を本位とせず、社會を本位となし、個人的



原理によらず、社会的原理に依るが故に、社会を本位とする社会主義も現はれたのであるし、資本主義さへも社会化して社会的資本主義たるにいたつたのである。社会的資本主義 *Sozial-Kapitalismus* は資本主義と社会主義とが結合し、社会主義の影響の下に資本主義が社会化したと見るよりも、一般に社会的原理が流通するので、資本主義も亦社会化し、社会的資本主義たるにいたつたと考へる方が正しからう。

国家社会主義も社会化の一の現はれであり、社会政策も亦さうである。現代国家に於ける労働政策、中等階級政策、社会保険、児童保護など、一として社会的原理の具現ならぬはない。これ等一般的傾向の一として資本主義が社会化され、若くは社会主義と結合して社会的資本主義なるものを造り出したのである。資本主義と個人主義とが必然的に関連するかどうかは別として、資本主義と個人主義とは類縁があり、一が存在すれば他も亦存在する関係のものであるといふことができるであらう。資本主義が十分發展せんには個人主義を要し、個人主義と結合しなければならなかつた。資本主義は素より経済主義 *Ökonomismus* で経済偏重であり、倫理を加へては居ないが、これが社会化すれば倫理化し、プロレタリアの幸福をも増進する方針

をとるであらう。社会主義の目的は経済主義ではない。社会主義にあつては社会的契機が前景に現はれるので倫理的となり、経済的多産を目標として利益を収得するよりも、民衆の福利とその最大限の實現とを目的とするのである。

個人的資本主義は個人主義の立場にあり、経済主義に終始するが、社会的資本主義は社会的主義の立場にあり、民衆の福利に向けられる。個人的資本主義は経済主義であるから、それによつて経済的に得るところが多く、これを社会的資本主義とすれば或はその経済的能率に於て劣ることとなるかも知れない。然るに、進化の方向は経済主義の如何に關せず、資本主義は漸次社会化して、個人的資本主義から社会的資本主義へ向ふが如くである。ここにも亦現代社会に於ける個人的原理が社会的原理に進展するといふ一般的原则が具現するを見る。

現代に於ては、個人は社会に置き換へられて居る。経済に於ても、現代では、個人本位の経済から社会本位の経済に移動しつゝある。社会は不自由なもので個人を拘束する。個人本位の経済は自由であるが、社会本位の経済は不自由で、同じく個人を拘束する。不自由経済即ち社会経済である。現代の経済は社会本位のもので、個人本位の経済は消滅しはしないが、個人主



義的經濟は死して、社會主義的經濟が生れるといふ見解が蔓つてゐる。たとへばゾンバルト氏は *Die alle Marktmechanik is vorbei* (すべて市場的機構は過去のものとなつた) と言つて、個人主義經濟の最早歸り來らざるが如き口吻である。併し、現實としては一の狀態に綺麗さつぱり飛躍することができないから、未だ一の狀態が低迷する間に他の狀態が現はれ出づる。ここに混合があり、折衷が行はれる。とは言へ、全體の調子としては、社會本位の行き方は現代人の信認を表すところで自由なる個人は去つて不自由なる社會はその代りとして現はれつつある。そこで、不自由で拘束するカルテルだの、トラストだの、國家社會主義だのといふものが登場して、經濟を規正し、それを規範つけてゐる。最早、以前の如く需要供給の我儘勝手な無政府狀態は許容されず、需給も、生産と消費も、資本と労働とも、社會によつて規定され、規範づけられて、一々中央より命令を受取るにいたつた。ここに、合理的經濟が始る。往時の流動的經濟は靜的經濟に改められ、生命經濟は器械經濟に組み改められつゝある。これに應じて、企業は凡て共同經濟 *Gemeinwirtschaft* の形ちをとるにいたり、國家的經營や、共同組合や、公私混合經營などが現はれ、社會を本位とする趣旨を宣明しつゝある。

資本金企業家とその組合、労働者とその組合も亦社會を本位とするにいたり、以前の如き敵對關係は後退して、友愛によつて労働條件を改善し、労働者の福祉を企圖せんとするにいたつた。

社會本位の經濟は形式化、官僚化を免れない。こゝに個人の自由は抑へられ、不自由社會が入來するから、この社會に於ては、個人の自由な活動は期待されず、たゞ規範に合するようにならざるが表面化する。舊時の市場構機が去つて、社會的見地がそれに代つて地平線上に現はれようとも、自由の問題が解決せられなければ、個人を目的として生きる人間と社會とに對して、餘り望ましき *situation* が打開されたと感じることはできなからう。

社會主義者達は次の社會に於ては固定する抽象化する全體的機構が現はれると言ふけれども、恐く、何人もこれに關して確定的な解答を與へうるものはないであらう。たゞ、一事の確かなことは、個人的原理ばかりでは現代人は満足しないから、必ず社會的的原理を加味するが、全く社會的的原理によつて機構を改鑄しうるかどうか分らぬ。



## 三個人的社会と社会的社会との統合

将来社会は社会的原理によつて組み改められつゝある。但し個人的原理も亦亡び去るもの如くあらざるやに見ゆ。私は経済史的発展によつて示現されんとする事實を確認せんとす。すなはち、経済史的発展によつて示現されるが如く見ゆる一事は、社会的原理が現はれたけれども個人的原理も去りはしないといふこと之れである。これによつて、将来社会の機構に關しては社会的原理もいり、また、個人的原理もいるのであると思ふ。換言すれば、人間の生活には「個人」と「社会」とが同時にいるのである。海野に據れば、個人は個人として生存することができないから社会に入つて生存するが、社会は個人生存の手段、個人は飽くまで生存の目的であるとする。かくの如き意義の開展は目的としての個人は手段としての社会に入り込んで生存するといふことである、この場合、「個人」と「社会」とは兩々認識確保せられる。一が現はれるとき、他が去るといふ關係にあるのではなく、人間の生存は兩者の統合によつて成し遂げられるのである。兩者の統合とは、言ふまでもなく「目的としての個人が社会を手段として生存」することである。

この原則に據れば、個人主義が去つて、諸々の社会的主義が現はれるのではない。個人主義の人間生存に必要な所以は経済史的発展によつて示されたが、これのみでは人間の生存を完成しえず、弊害顯著たるにいたるので、もう一つ、社会的主義が現はれて、それを補充するのである。茲に、社会的主義が現はれて個人主義が去るといふ意義が示現されず、兩者統合する意義が発現する。

海野の學論では、人間の生存には個人も社会もいるのである。個人のみで人間の生存を保全することはできぬ。それかと言つて、社会のみでは手段ばかりあつて目的なき奇觀を呈す、そこで個人が社会を手段に使つて生存する一形式を生じなければならぬと考へる。社会組織は無論人間がそれを使つて生存せんとする道具に過ぎぬ。社会組織なるものは、人間の生存に都合のよいように右にでも左にでも向きかへられて、人間生活の豊滿を齎らし得さへすれば宜いづである。然らば、個人主義社会と言ひ、社会主義社会と言ふも、人間の生きるに都合のよいとくに組み改められさへすれば宜いわけである。



かく見れば、個人を目的とし、社會を手段に使つて人間の生存に都合のよいような社會組織が最も望ましいものと考へれるであらう。この最も望ましき社會には個人も社會もいる。然らば、個人主義が去つて、社會主義が入來するなどは思はざるも甚だしいと言はなければならぬ。ゾンバルト教授の如く、「個人主義的經濟は去れり」と呼ぶのは、恰も目的としての人間は去れりと言ふに等しく、人間が棺桶へはいつて、棺桶ばかり獨り立派に安置せられるのが萬々歳であるといふに等しい。人間が去つて、それに這入る道具たる社會ばかり立派に安置されても仕方がないではないか。社會は飽くまで個人とその生存とに奉仕する道具に過ぎない。

かゝる見地からは、個人主義を目的として、社會的主義（社會主義にあらず）を手段とする思想に達するであらう。これを統合的社會組織論といふ。

經濟史的發展を顧みれば、個人主義が去つて社會的主義が入來するのではなく、個人主義と社會的主義とは兩々人間生存に在りて兩者の組み合せをまつものの如くである。現代國家は大體個人主義の立場にあるが、それと同時に、社會的主義をいれて居り、こゝにも、個人主義と社會的主義とは結合して居て一が現はれて他が去るといふ關係をとつてゐない。個人主義が

去つて、社會的主義が現はれたやうに考へるのは經濟發達史を正當に理解し正當に解釋しないものである。

流動的經濟は固定的經濟に進みつゝあり。小企業は大企業に取つて代はられ、國家が社會化し、國家社會主義なるものも現はれ、社會的主義の社會が急いで入來しつゝあると言はれる。資本主義的經濟の發展に連れて、自由放任は統制されつゝあり、かくて、社會的に規律せらるゝ時代に進入するのであると簡単に考へられてゐる。規律せられ統制せられたる資本主義は社會主義に轉化せしものであると言はれる。産業が漸次社會的見地によつて規律されるに連れ、公企業化し、その歩を進むれば、必然的に社會主義化すると云ふ。社會主義が前進するといふよりも社會本位主義が前進するといつた方が一と先づ妥當であらう。社會的基準の要求は時代の趨勢であつて、これに對しては毫も疑ふことはできない。私的な孤立する企業はカルテルやトラストに合同され、それによつて統制せられて行く。これも確かなる事實だ。かくて、經濟は竟に國家的機關によつて司掌され統一されるかも知れない。私的企業は民主主義國家に於ても議會の獨裁に委ねらるれば、茲に社會的主義の體現とならう、かくてシユマアレンバッハ氏



(Schmalenbach) の言ふように、國家萬能となるでもあらう。シ氏は Die Monopolgebi-  
Ide der neuen Wirtschaft müssen ihr Monopol vom Staat empfangen, und auf der  
anderen Seite überwacht der Staat die Erfüllung der aus dem Monopol entspringen-  
den Pflichten と言ひ、國家は經濟を獨占して權利を張るが、その代り又義務をも負ふのであ  
るといふ。

かくの如き方法は、恐く、一般的にわたるでもあらう。併し、これは經濟史的發展を見誤つ  
たものでもあらう。或は輕卒に經濟の進行に判斷を下したものであらう。個人主義的經濟が  
亡び去つて、その代りに國家によつて獨占されたる經濟が出現すると考へ、自由なる經濟は規  
律されたる經濟や規範的經濟に轉ずる様に簡單に考へるが之は經濟發展の性質を味解せざるも  
のである。問題は經濟の轉化ではなく、人間生存上の原則の進動でなくてはならぬ。人間生存  
の進動に於て示現さるゝことは個人本位であつたが、それでも足りないといふことである。個  
人は社會に入つて生存しなければならぬ。個人は個人として生存するに非ずとの原則を無視し  
たものが個人主義であり、自由主義的經濟であり、資本主義的經濟である。個人は個人として

生存する術を知らざるが故に、社會をつくり社會に假托して生存する形式をとるにいたつたの  
である。原始以來確立せしこの生存形式が現代社會に現はれ、その解決を次の社會に求めつ  
ゝある。近代現代の個人主義、自由主義は人間の當然採らなければならぬ社會的生存形式を忘  
れてゐた。人間は個人としてやつて行けるものと妄想してゐた。然るに、これが不可能なこと  
が漸次意識に上りかけてきた。そこで、社會だ社會だと言ひ出し、社會を本位とする基準とす  
る思想が現はれてきた。何か珍らしもののように社會的主義を見、又一種特別の社會理論でも  
發見したかの如く社會理論家達は考へてゐるが、何も特に珍重すべきものではない。個人が個  
人として生存するを得ずといふ原始以來の人間生存形式が近代人現代人の意識に上り來つたま  
でである。

この根本原則を忘れて居るから、「個人と社會との組合せ」を必ず要する生存形式の思想に  
到達することができないのである。經濟や經濟的發展を見るだけでは足りない。人間生存の根  
本原則を正視するを要する。然らば、個人が去つて、社會が現はれるのでなく、個人と共に社  
會が要るのである。目的たる個人ばかりが登場し、手段たる社會が未だ登場しないので、社會



の登場を促し、個人と手をつないで演戲をさせようとするのが現代ではないか。これが經濟とその發展とに現はれ、個人的經濟に加へて、もう一つ社會的經濟を登場せしめ、個人的經濟と社會的經濟の形ちで人間の生存を達成せんとするのである。個人的經濟と社會的經濟の組み合わせに於て、個人的經濟と社會的經濟の形式をとるべきであり、社會的經濟と個人的經濟の形ちをこるべきではない。個人はどこまでも目的であり、社會はどこまでも手段であるから。

經濟史の發展について見るも、社會主義が現はれても、個人主義は低徊して去りやらぬ狀勢を示してゐる。個人主義が去つて、社會主義が現はれるといふよりも、今の狀勢は個人主義と社會主義との中間階段に低迷してゐる。現代人の社會的經濟的思惟は個人主義的でもなく、又社會主義でもない。個人主義を離れざる程度に社會主義を加へるといふところに、現代人の特殊な思惟がある。國家社會主義は無論個人主義的經濟の立場にありながら、社會化して全體を經濟の對象とする。聯帶主義も亦それに同じく個人主義の立場にあつて、社會主義を加味する。これ等の行き方は思想が中途半端に止つて居るといふよりも現代人の思惟方法は斯くの如き折衷的なものである。併し個人主義と社會主義との折衷を以て現代經濟の眞髓を表示

せんとするクンプマン氏の考へ方は妥當ではなく、もう一步進まなければならぬであらう。海野はこの場合にも、目的としての個人が手段としての社會的生存形式を基準として考定する。然らば、現代人が個人主義と社會主義とを折衷して考へるといふよりも、兩者を有機的に統合して考へてゐるのである。折衷は無意義で、混合する以外に意味はないが、有機的統合は「個人」と「社會」とを同時に要し、これを一定の法式（如何なる法式でも結合すれば宜いのではないから）に統合することを意味する。一定の形式とは、個人を本位とし目的として、社會を副次とし手段として結合するものである。すなはち個人濟經濟と社會經濟の法式に結合するものが有機的統合である。クンプマン氏はかかる有機的統合の思想に出入して居ないから、單に Bei so widerstreitenden Zeitströmungen finden im ganzen jetzt und in nächster Zeit Wohl die eklektiven Wirtschaftsordnungen noch den meisten Anklang といひ、なほ、現代の傾向は單に個人主義と社會主義との中間にありとつて Auch von der Mehrzahl der heutigen Sozialdemokraten wird man sagen können. das ihr wirtschaftlich-soziales Glaubensbekenntnis sie in Wahrheit den zwischen Individualismus und Sozialismus pakti-



erenden Richtung zuweist」と言ひ、有機的統合の代りに單なる中間説を持ち出して居る。

#### 四 個人主義的經濟と社會本位主義的經濟との統合

個人主義的經濟は簡單に社會主義的經濟に推移して居らぬ。現代人は強い反感を集中經濟にもつて居る。自由人としての現代人が不自由經濟としての集中經濟、社會主義經濟に厚意をもちそれを喜び迎へると單純に考へることはできぬ。國家や議會が無闇に個人經濟に制壓を加へてはたまらぬと考へて居る。一にも社會、二にも社會、三にも社會では個人は呼吸する自由をさへ奪はれると考へ、集中經濟などといふ怪物に對しては寧ろ敬遠をして居る。然るに、單純に現代人は社會主義的經濟を喜び迎ると考へるのは、現代人の特質に盲目なるものである。奇聲蠻聲をふり上げて社會主義を謳歌する未熟な青年や無學な無産者や労働者などが現代の特質を無論深く理解して居るはづはなく、單に附和雷同して、何のことか分らぬことにわい／＼言つて居るに過ぎない。かゝる人々の間にどういふ思想が蔓延しようとも、また特殊な理論家などういうように社會主義を讚美しようとも、それは現代の特質とは何の交渉もないのであらう。

現代の特質としては、個人主義に於ける個人の自由が忘れられぬことにある。それと共に、現代人は社會を如何にはたらかして、銘々の社會生活を如何に活用しよかと思案してゐる。素より現代人は個人生活にのみ依ることはできぬとあきらめ始めて居り、社會生活に依る外はないと思つてゐる。併し、それであるからと言つて、個人生活をかなぐり捨てるとも決心をして居ない。個人生活と社會生活とが何の關係もない觀念たる路傍の亡者であつたり、若くは、對立的なものであつたりすれば、社會的理論家の考へるが如く、個人生活が去つて社會生活が現はれると簡單に考へなければならぬであらう。が、個人生活と社會生活との關係は決してそんな簡單なものではない。個人は目的たるべきものであるが、個人は個人として生活することができぬように運命づけられて居る。よつて、個人は社會のうちに入り込み、社會的生活を始めたのである。この觀念は個人十社會（社會十個人にあらず）であつて、個人と社會とは切つても離すことはできぬ關係にある。すなはち兩者は一有機體の部分たるのである。有機體の組成要素が一定の結合法式をとるが如く個人と社會とは有機的の結合體にあつて一定の法式（個人十社會）により結合するのである。こゝに、統合的社會が現はれる。



次の社會には純粹個人主義經濟は最早維持されなだらう。併し、純粹社會主義的經濟も亦人間の特質として（自由を求むる人間として）これをその儘次の社會に採用せしむることも能きなからう。こゝに、現代人特有の悩みがある。如何に兩者を統合せんとするかについて、現代人が懊惱してゐるのである。純粹個人主義でもいけない、純粹社會主義でもいけない。然らば如何なる法式によつて兩者を統合するか、現代人の最先な最重要な問題である。クンプマン氏はこの意を表はして *Die passendste Synthese von Kapitalismus und Sozialismus, dir- the die nächste grose Zukunftsaufgabe der europäischen Menschheit sein* と言つてゐる。クンプマン氏は未だ個人と社會とを統合する形式に考へ及ばないようであるから、現代人は單に個人主義經濟と社會主義經濟とを混合し折衷するように思つて居るけれども、海野の如く個人と社會との關係を考定するに於ては、目的としての個人と、手段としての社會とが有機的に統合するのである。それ故、將來の社會に於ては如何なる政治經濟上の形體を取るにせよ、必ず個人が社會を手段として生活する個人的集團 (*Individualverbände*) の形ちをとるであらうと思ふ。人間は個人として生存することはできないから、社會に入り込むが、この場合

個人は個人的集團に入り込むのであり、社會的集團 (*Sozialverbände*) に入り込むのではない。集團は個人が目的か、社會が目的かに従つて、個人的集團と社會的集團との二に分れる。個人的集團は個人を目的として社會を手段とする集團であり、社會的集團は社會を目的となし個人を手段とする集團である。資本家は集團を利用して私利をはかり、集團なんぞといふ全體に忠誠を勵むのではないから資本家としては資本家階級を利用するだけで、實は資本家階級なぞといふ全體はその關するところではなく、資本家は絶對利己主義者である。資本家階級といふ集團は個人的集團の一種である。人間は凡て個人とその生存とを目的となし、社會を手段となし道具と解するから、人間は資本家を一例とするが如く凡て利己主義者ならぬ人間は一人もない。（拙著「閥の偶像」参照）この事は人間が個人としての生存を保全せんとして社會に入り込んだことを回想すればよく分る。人間は個人の生存を助長せんがために集團を利用し社會を利用したまで、社會の齒車として社會に奉仕する氣は毛頭もち合はさないのである。

この考へ方によれば、個人と社會の形式で兩者は統合せられる。現代に於ては、個人が基本となつて、社會がこれに従屬しながら存在するのである。この二の關係を如何に定めんとする



かによつて見地が分れる個人主義者、自由主義者、資本主義は個人をどこまでも本尊として。これを保存すべくつとめる。社会主義者は社会を本尊として、次の社会を社会本位社会としての社会主義社会であると考へ耽る。クンプマン氏の如き折衷論者は次の社会を以て個人主義と社会主義との折衷であるとする。統合の見地にあつては、個人を目的として手段たる社会が統合されると考へるから、兩者の有機的統合を以ての社会が入来するのであらうと観測する。資本主義と社会本位主義との最も妥當なる綜合が現代及次代にわたる文明人の最も重要な懸案たるであらうが、現代に於ける個人と社会との関係を仔細に點檢すれば、その歸趨は明かであると思ふ。一度び錘が個人に傾いた。二度び錘が社会に傾いたといふようなことは有りさうなものであるが、それは極めて短時間の中間状態で、人間は徹頭徹尾個人と社会との関係をどう片付けるのが最も妥當であるかと考へつづけてゐる。

實は現代人は個人と社会との関係を深く思念しつつあるのであり、單なる經濟組織を考へて居るのではない。現代の經濟組織は未完成の状態にあり、未だ成熟しきらないで、まご／＼して居り彷徨ふ状態にあるので異なる主義が出場して互に争ひ、紛々擾々を極めて居る。この状態は

未だ少々續くであらうが、かかる過渡状態に於て、當面のものとしての個人主義經濟と社会主義經濟との問題は單なる表現たるに止り、その底流として個人と社会との関係が控へてゐる。海野は個人と社会との關係に對し個人的形態と集團的形態とを統合する案に達しこれを「社会政策概論」(赤爐閣發行)に披瀝した。この文献は今後個人と社会との關係に於て開發すべき海野の學說の基準をなすものであり、海野はこの關係を深く追及分析して「社会学原理」に於てその終局の形相を見とどけやうとする。今のところ、海野の統合説は首尾一貫「社会政策概論」に現はれて居り、ここに社会組織の方法論をも酌むことができるから、讀者は更らにこれによつて著者の思想に熟せられんことを望む。

### 五 資本主義經濟の運命

個人主義的經濟制度が亡び去り、社会主義的經濟制度が現はれるように單純に考へるものは、次の社会にいたつて資本主義の運命が行き詰ると考へるであらう。但し、個人主義と社会的主義とはそのような一方的の關係ではなく、個人主義的經濟が社会的經濟に統合し、若くは



折衷して残るが如く觀測することもできる。よつて、必ずしも資本主義は死滅の運命にあると考へることはできなからう。資本主義は、通常、個人主義が漸次規律され規範化されて、社會の統制に従ふにいたり、亡び去る如く考へるけれども、經濟の發展はそのような簡單なものではなく、恐く、それは一方的解釋をゆるさぬであらう。

現時、既に資本主義が歿落しつゝあると考へる一派にあつては、資本主義の重荷が漸次に感ぜられ、失業者増加し、無産階級の貧困化は漸進して怖るべき程度に達するとす。されど、かく如き一方的に簡單なる解釋を與ふことは不可能であり、今に於て、容易に資本主義の運命なるものを論結することができない。

言ふまでもなく、資本主義は人間の生活を豊富にし、多岐となし、人間の幸福を増進した。以前の憐むべき小屋生活は、今では、それよりも萬人に遙かに好良なる生活を齎らした。ために、人口は増加した。複雑にして巧妙なる技術的組織的機構の發達あり、生産は非常なる長足の速度を以て激増し、大なる人口を支持することが可能となつた。資本主義は失業者の増加と他國の掠奪によつて生産を増加した。但し、それも終末に近づいたと簡單に考へるが、かかる状

態の入來を確證する途がない。それに、社會主義者の云ふが如き、工業的進歩の速度の遅くなつたことや、その減衰も今のところ證明することができない。これに反し、今尙ほ、工業的進歩は無限に増進する形勢にあり、いつその進歩が停止するや明かならず、資本主義が日新月歩の工業を用ゐて人類の物質的幸福を圖る可能性は餘裕綽々として倒盡するとも思はれない。

資本主義は未だその生命を消盡せざるべく、尙ほ、その生存を續くべきは蓋し明白であり、それは人類の物質的增加と福利とを圖る使命を放棄しないようにも見える。但し、かゝる異論の多い問題に對して茲に簡單に片付けることはできなからうから、これについては別著にゆづり、資本主義の運命を精論する際にゆづる。

## 六 次の社會の展望

世界の人類は次の社會を何故追ひ求め渴望するであらう。今の社會が何故倫理的規範により規律せられつゝあるか。世界の人類は人種と國と階級とを異にするに拘はらず、いづれも幸福を追ひ求めつゝあるに異りはない。ここに、倫理的規範が入り込む。經濟と倫理とは兩立しな



い。又、經濟は價值判斷に禍ひさせてはならないといふ見解があるが、これは成立しない。個人が一の社會的經濟に入り込まんとするのは、それが倫理的に見て價值あるからであり、またそれが人類の幸福を齎らすと考へるからである。人間は如何なる經濟組織に於て倫理的存在としての性能を最もよく満足させることができるか、如何なる經濟秩序に於て人類の幸福が最もよく實現され得るかと考へることを避けがたい。ここに經濟が人間の精神的慾求と離れず、倫理と絶縁することのできない理由がある。人間と物、倫理と經濟とは學の上では分斷されるが現實では學の便誼に従つて分斷のようなものではなく、彼此相關連する。

そこで、經濟は物の經濟でなく、人間の經濟である限り、人間中心、目的中心によつて規律され運営されなければならぬ。經濟は人間の福祉を招徠し増加する道具たるに外ならず、技術は倫理を體現する手段たるに過ぎない。

個人は個人として生存することはできない。倫理的に見て個人が個人によつての生存は價值あるものと見ることはできない。個人は他の仲間と提携しなければならぬ運命をもつて居る。ここに、仲間生活が始まる。現代經濟と次代の經濟とが要求するものは、この倫理的原則の體

現である。個人は個人として生きることができない、よつて、もつて、仲間として生存せんとする。ここに、次の社會の展望が行はれる。次の社會でも個人的基準を見捨てはしないであらう。個人を見捨つるが如き社會が一度び誤つて人類によつて導入せられざるやの懸念はあらう。社會主義者は通常個人的基準を見捨てて、専ら、社會的基準に移らうとするのであるが、この構想からは個人的社會を全く離れて、純粹社會的社會に入り込まんとするのである。但し、全く個人的基準を捨てるのは一の誤を離れて、他の誤りに入らんとするものである。個人的基準社會には弊害があつた。そこで、この社會を壓倒し去らんとするのであらうが、社會的社會にも欠陥が附隨する。社會的社會は如何なる形式のものでも、人間の自由を奪ひ去り、それを社會の規律に詰め込み、平均的人間を造り出さんとするのである。茲には、創造は凡て死し去る。この社會には思想の創造も、信仰の創造も、藝術の創造もなく、あるものは冷骸に等しき平均的構成物のみ。かゝる不自由社會を個人的自由社會の代りに安置せんとするなれば、それは一の誤りより他の誤りに入り込んだことになり、結局、何の改善をも齎らすことができぬであらう。



そこで、次の社會は純然たる社會主義たることはできないし、また、倫理的要求として、そのような社會たらざるを望む。社會主義は無論經濟偏重の社會ではない。かように解されたる社會主義はその正體に接近されざるものである。社會主義は個人經濟を減縮して、社會經濟の權力を増大せんとするものである。但し、社會主義は經濟的關心を中心に置くものではなく、従つて、それは資本主義の如く *Okanomismus* に重點を定めるものではない。社會主義は寧ろ非經濟的な社會的契機に重きを置き *Streben nach mehr Menschenglück* に標準を置く。それに應じて、社會主義の目的は私有財産の撤廢や共同強制經濟にあるのではなく、その目的たるや、それ等の手段を通じて貧困、罪惡、階級的對立を除去せんとするにある。人間の生活標準が高まり、罪惡が減少し、階級的對立が少くなれば、ヨリ人間の幸福が増大されることとなるが、かくの如き世態の實現が社會主義の眞の目的であらねばならぬ。佛蘭西のゾラはその理想社會の面影を描いて、「そこには最早階級闘争なるものが行はれない。そこには、たゞ一の階級が存在するだけであり、労働者なる人間があるだけである。そこには一様に富み、一様に幸福であり、一様に教育され、一様な教養をもち、最早、その衣服に於ても、その住居に於て

も、その習慣に於ても、異なるものを絶えて見ることができない」と言つてゐる。社會主義の目的が平等であるからには、かゝる社會は社會主義の目標であらねばならぬ。然らば、社會主義は闘争よりも協調に、戦争よりも平和を目的としなければならぬではないか。社會主義のうちには共同意志と愛とが含まれて居るとする。こゝに、社會主義の要求が社會の平和、人間の幸福にあつて、その固有の經濟と經濟組織とにあらざるを知る。然らば、社會主義に於ても、經濟と倫理とは不可分の關係をつくつて居るではないか。

この事は資本主義に於ても同一である。ゆるやかなる意義に於ては、資本主義に於ても、經濟と倫理とは提携して居り結合して居る。倫理は經濟のうちにも入り込み、經濟秩序を通じて倫理的表現を行はんとする。資本主義は個々の資本家の貪慾を度外して、その出現以來、全體として人類の生活を豊富にし、人類を幸福にした。資本主義は物質的基準の上に一層進歩せし社會組織をつくり、人間の幸福と人間の價値を増進する役割を與へられて出現し、大體、その使命を完了せんとする。かくて、資本主義に於ても、社會主義に於ても、その經濟は單なる經濟にあらざるを知る。動物の經濟なれば經濟の故の經濟たるに止るであらうが、それが、人間



の經濟なる限り、經濟を通じて倫理を體現し理想を實現せんとするは避けることができない。人間界に於て經濟と倫理とを分斷せんとするのが既に無理である。

然らば、その社會に於て、人類の倫理的な要求が如何に現はれてゐるか、人類の幸福を増進する途は如何なるものとして示現されて居るか、基本問題たるのであらう。人間は倫理的な存在物たるが故に、その經濟は倫理を體現する手段として用ゐられなければならない。個人が個人として生存する形式は自由主義經濟のものであつたが、この經濟組織は原始以來人間が仲間として生存せし形式を無視したものであつた。それは虎や獅子の如き強食弱肉主義によつるものであり、優勝劣敗となつて世界を混亂に陥れた。そこで、社會政策だの社會立法だのといふような形ちで、個人の自由を制限し、國家が出勤して個人の無政府状態を減縮する機運となつた。かくて、再び、仲間生活が導入せられんとする。

國家の出勤も、社會主義の出現も、仲間生活を恢復する使命を帯びるものに外ならない。國家は強制力を用ゐて個人の自由なる經濟活動に制限を施し、社會を一體として生存せんとする形式をとり、社會主義は社會を基準として合理的經濟組織をつくり *absolut organisierte*

*Gesellschaft* を基準として自由なる經濟に改鑄を加へんとす。社會の目的はあくまで個人に對してではなく、社會に對してある。資本主義と雖も現代の色調を帯ぶるからには、純粹個人的なることはできず、社會化して、個人的資本主義は社會的資本主義に轉化しつゝある。個人主義と社會主義とは兩端にあるものとして對立し矛盾して相容れざるものと考へられた。そこで、個人主義を體現する資本主義と社會主義とは相鑿相いれざる二の經濟組織なるが如く見做されたのである。これ即ち、個人的資本主義の立場であるが、今や、社會的資本主義に於ては奈何。

資本主義が社會主義に結合するところに社會的資本主義 *Sozialkapitalismus* が現はれる。個人的資本主義は經濟主義で經濟的な最高生産を目標とするが、社會主義は經濟であるよりも社會的契機であり、經濟的な最大限を目標とせず、社會的飽和 *soziale Optimum* を目標とする。然らば、社會的資本主義に於ては、經濟主義と社會的飽和とが結びつき、*ökonomische Maximum + soziale Optimum* を實現せんとするのである。ここに、在來の資本主義と全く趣きを異にする面影が窺はれる。こゝにも、經濟と倫理とが不可分たりとの例證が提示せられ



る。資本主義と社會主義との結合によつて、社會的資本主義なる一形體が出現するにいたつたがこれは海野の學論の正しきことを證明する一例證として興味津津たるを感ずる。海野の學論にあつては、個人と社會とは結局必ず結合する。そして、個人は目的として、社會は手段として結合する。なほかくの如きは社會は個人の利益を基準とし、全體を單に個人の利益實現の手段として利用するものとする Individualverbände たるのである。然らば、個人主義なる資本主義と社會本位の社會主義若くは總ての社會主義とは不可分の關係にあり、海野の統合主義なるものが經濟史的發展によつても證明されつゝあることを感ずるのである。

現代ではすべてが社會に向ふ。現代文明國家は何づれも社會に向つてゐる。資本主義さへも社會化して社會へ向ふ。これは現代社會の特質であり次の社會の機構たるべきものであらう。資本主義社會が單に經濟偏重で、經濟主義に走り多産を事となし人類の福祉を一時忘れて居たのは（今は社會的資本主義として忘れては居ない）誤りであることが分つてきた。それかと言つて個人的立場を見捨つべきものではないと現代人は考へて居る。現代人は社會本位の經濟組織に反感をもち、それを信認して居らぬ。今の社會が次の社會へと移轉するのは、現代人が個

人的經濟機構に反感をもち不信認を表するからであると社會主義者達は簡單に考へて居るが、現代人は却つて社會本位の機構を好んでは居らぬ。現代人は寧ろ社會を本尊となし個人の一舉一動を制壓する不自由組織に反感をもち若くは好意をもつて居らぬ。この事を私は特に明かにするを要すると考へる。私は社會主義が嫌いなものでも、それに反感をもつて居るのでもない。ただ私は學究であるが故に、事實に従つて歸納し、有りのまゝに斷定を下してゐるだけである。輕信により、一種の妄信によつて、社會を本尊とする社會主義に對し私は時代錯誤であると考へ、經濟史的發展の跡を明確に分析闡明したいと考へるまでである。

今の社會の要求するものは二であつて、決して一ではない。資本主義は個人のみを確保する社會主義は社會のみを確保する。海野にあつてはこれが資本主義と社會主義との欠陥であると考へるのである。海野は社會宣傳家の亞流に従つて資本主義をこき下さぬ。資本的生産はそれ自づから人類の幸福を實現したし、又將來、引きつゞき經濟的福祉と物質的福祉とを増進する餘地のあるものと考へる。資本主義に對しても事實判斷をなすべきであつて、好惡によつて學理をひん曲ぐべきものではない。海野は學理に従つて資本主義の功績とその將來の使命とを認



めるが、又、それと共に、資本主義の著大なる弊害については眼を反けるようなことは斷じてない。

海野にあつては、個人と社會との二を確保する。そして、これを有機的統合の形式の下に結合せんとする。ここに、海野の獨自なる社會理論が生れる。海野は個人主義的な資本主義に共鳴するところが多い。海野はあくまで個人主義者だから。海野の新個人主義（在來の純個人主義ではなく、個人と社會との統合的見地によるから）はそれに基き理論構成をなすべきで、海野は近く著作する「社會學原理」にいたつて始めてこれを明かにするが、海野は個人主義の立場にあつて社會の立場をいれんとする。手段としての社會は個人の生存に欠くことのできない次第については海野は「階級闘争の研究」や「社會政策概論」に於て前衛としての理論發表をなしてゐる。本書に於ても、次の社會に如何にそれが實現されるかを考察せんとした。資本主義に於ける個人のみの確保、社會主義に於ける社會のみの確保は**いづれも誤りであらう**。正しい社會觀には必ず「個人」と「社會」とが併せいる。

次の社會の展望に於て、個人と社會とは如何なる組み合わせをなすか。次の社會に於ては、社會主義社會といふやうな限定せられたものが現はれるとする見解は誤りであらう。それよりも、一般的に社會的原理を體現する諸々の社會形體が紛然雜然出現すると見るべきであらう。但し在來の個人主義や個人的立場は恐くなくならない。一時或は個人主義とその立場とは後退するかも知れぬが、これは人類が一時に必要なべき契機をのこらず握りえず、一つ一つ把握する餘儀なき結果たるまでで、個人と社會の結合は結局實現さるるであらう。然らば、次の社會の展望に於て最も大切なことは個人と社會とが如何に結合すべきか、個人的原理と社會的原理とが如何に結合すべきかの問題である。この一の問題が今の社會、次の社會を煮つめて最後に残つた最大問題たるであらう。

現代人は如何にこの問題を解決するであらう。現代人は次の社會を如何なるものとして色彩を施し、如何なるものとして實現するであらう。問題は迂餘曲折、紛然雜然、右に左に回轉するであらうが、その目指す方向は明かである。それは最早純粹個人主義には向かはない。さりとて、純粹社會的主義にも向はないであらう。恐く、次の社會の面影は個人と社會とが一定の法式によつて結合せられ、個人的原理と社會的原理とが一定の法式によつて結合せられるとこ



ころに生れるであらう。ただ、この一事は明々白々疑ふことはできぬであらうと思ふ。

海野は本書に於て何等主観を交えず、客観的に正確であると見るところに従つて、次ぎ／＼に論理を展開して行つた。海野は研究家の態度に終始し、何づれの主義にも好悪の觀念を以てのぞまず、有りのままに、その真相を披開せんとつとめた。その結果、個人と社會とを並せ残し、個人的原理と社會的原理とを並せ残した。もう一つ、海野の残したものは、個人と社會とを一定の形式に結合すること、個人的原理と社會的原理とを一定の形式に結合すること之れである。

かくて、海野は次の社會を展望して、それは個人と社會とを一定の形式に結合する統合社會であると觀測し、個人的原理と社會的原理とを並せもつ統合的機構であらうと豫測する。

資本主義は恐く死なない。これは未だ人類に奉仕する役割をもつであらう。併し、社會を本位とし、社會に入り込んで社會化する形式は如何なる主義によるものたるを問はず共通であらう。ここに、個人主義經濟制度と社會本位主義經濟制度の各人類に貢獻奉仕すべき役割と使命とがあらう。

この構想に基き、海野はこの見地よりする「資本主義の研究」なる著作と、「社會主義の研究」なる著作とを近き中に江湖に提供し、更らに、「理想社會の研究」に於て兩者の統合するところに如何なる形體が生ずるかを検討するであらう。

かくて、統合原理の上に海野の學論が終始一貫大成する機運に達する。

### 参 考 文 籍

1. 海野幸徳「階級闘争の研究」赤爐閣發行
2. 海野幸徳「社會政策概論」赤爐閣發行
3. Sombart, Grundlagen und Kritik der Sozialismus, 1912.
4. Pohle, Kapitalismus und Sozialismus, 1919.
5. Plenge, Zur Vertiefung des Sozialismus, 1919.
6. Kumpmann, Kapitalismus und Sozialismus, 1929.
7. Mises, Die Gemeinwirtschaft, 1922.



8. Müller, F. Abhandlungen in wirtschaftswissenschaftliche Vierteljahrshefte, 1928. Heft 2.
9. Coudenhove-Kalergi, Apologie der Technik, 1922.
10. Pieper, Kapitalismus und Sozialismus als seeliches Problem, 1925.
11. Rathenau, Die neue Wirtschaft, 1918.
12. Fischer, Das soziologische Werden, 1913.

## 第十六章 理想社會

理想社會の何であるやは具體的には無論分らない。次の社會が如何なるものとして現はれるか、具體的に分らないのであるから、理想社會の具體的面影も亦描寫することは不可能である。これに對し、原則だけは略明かに把握し了解することが出来る。個人主義的社會に於ける個人的原理だけでは不十分であつた。個人的原理に十分の信認をつなぎ得ないところに、現時の混亂の根源がある。個人を最高の原理と見、それが人間生活上の最高の目的であり、社會は生活上の單なる手段だと見るところに、現代人は個人主義に十分の信認を表することができないのである、この場合、個人と社會とは對立觀念であり、個人に對し、社會は何の關聯をなして居らぬ、個人本位の原則は理想社會の生存原理たるには足りないし、また、生存原理たることもできないと現代人は考へるのである。こゝに、現代人が社會的契機をいれなければならぬと考へるにいたつた理由がある。



現代に於て、諸々のイズムが等しく社會本位思想に向ひ、それによつて、社會的機構を造り出さうと努めつゝある所以のものは、現代人が悉く個人本位の行き方に不信認を表白しつゝあるためであらう。個人本位より社會本位に向ひつゝあることは一般的な傾向であり形勢であつて、それが個人によつて意識されて居ても意識せられて居ないでも何の異りはない。意識するにせよ、しないにせよ、現代人は全體として、個人本位に不信認を表し、社會本位に向ひつゝある。

併し、現代に於ても個人主義、個人本位は死んだのではない。個人主義と個人本位とは社會本位思想と混つて存在して居る。個人主義若くは個人本位思想は人間を人間たらしむる機構であるから、結局、如何なる形ちに於てか保在されなければならぬし、また、殘存するでもあらう。如何に社會本位思想に現代人が向ひつゝあるといつても、現代人は、到底自由人たる位置を全く見捨てるやうなことはない。實は社會本位の社會に入り込めば、人間らしき生活もでき、自由も増大するであらうと漠然ながら考へつつあり、それに従つて、社會を求めつつけるのである。社會に入り込めば自由を喪失し、社會の齒車となつて一舉一動社會から制壓を受く

るのであり、豫想に反して人間生活をなすことができないと知つたら、恐らく最後の一人にいたるまで、かかる非人間社會に加入したいと頼みいでるものはあるまい。然らば、社會に入り込む動機は矢張自由にあり、人間生活にあると解しなければならぬ。

社會に入り込めば、人間の自由は失はれ、自由人としてのみ亨存しうべき人間生活なるも従つて失はれるが故に、個人的原理から社會的原理に移つただけでは、理想的な人間生活をなすことはできない。個人的原理はそれ自づから全からず。そこに社會的原理を探らんとする方針となつて現はれるが、社會的原理も亦それ自づから全からず、然らば、個人的原理とそれに基く個人的機構とは、單に社會的原理によつて、それを改め、社會的機構によつてそれを補つたからとて、中途半端で事態を根本的に改善することはできないであらう。

ここに於て、個人的原理と社會的原理とを統合する案に達し、また、これによつて、理想的社會の何であるやを豫想せんとする考案に達するであらう。かくて、理想社會は個人的原理と社會的原理との統合する社會的機構であるといふことになる。理想社會も亦突然出現するものでないとするれば、既に現代國家も亦多分に個人的原理と社會的原理とを併せ入れ、既に理想社



會の面影を多分にもつものと解釋しなくてはならぬ。この意味に於て、理想社會は將來に求めらるべきものではなく、既に眼前に開展し始めたのであり、將來鮮かにその姿を現すであらうことが豫測せられるだけである。

世界の現状は怖るべきものであり、悲惨なるものである。その混亂は正視することができぬもので、次の時代の形相悲惨に充ちて居る。現代は工業主義の時代であり、その二の形式たる資本主義と社會主義とが對立し、資本主義的精神と社會主義的精神とが抗争して、世態を混亂に陥れて居り、國民主義は帝國主義と民族自決との二の形ちとなつて互に争つて居る。

資本主義と社會主義と帝國主義と民族自決とが歐洲大戰後に登場して演技をなす役者となつたが、資本主義と民族自決とは自由の原則により個人を基準とするが、帝國主義と社會主義とは集團主義又は階級主義で全體を基準にする。社會主義が現實すれば人間の物質的福祉と精神的福祉とを如何に増大するか知らぬが、それは如何にしても全體社會であるから、官僚的強制的機構たらなければならぬ、なほ、それは階級主義であるから、偏狹なる國民主義と同じく、自己の區劃あるを知つて、他の區劃他の階級を知らず、畢竟、人類的立場から見たる人類一般

の福祉とは何の交渉もないものであらう。工業主義は一は資本主義となつて現はれ、個人を本位となし、他は社會主義となつて現はれ、社會を基準とする。國民主義も亦階級主義である。國民主義は集團を基準となし、自己集團あるを知つて他の集團あるを知らぬから、偏狹なる排他主義排外思想となつて現はれる。集團はそれが集團として形成せれるや、集團内の心理と集團外的心理とを發する二重論理となり二重道徳となる（拙著「階級闘争の研究」を通讀されたし）國民主義は地理的に區劃されたる一の地域を限り生存し繁昌せんとし、その他の地理的區劃を一切排除し撲滅せんとするものである。偏狹なる國民主義は現代の如き國際機關の濃厚となりまさる時代に於ては漸次世界の平和攪亂者となる趣きがある。國民主義は集團本能に支配される、限り非合理的なものの感情的なものである。これは社會主義と同じく階級主義で、一の集團の生存と福祉とを企圖實現すれば足りるのである。國民主義は國民を一階級とする集團主義である。社會主義は階級を基準とする集團主義である。國民主義は國と國とを争はしめるが、社會主義は一の階級と他の階級とを争はしめる。國の戦争によつて國家が興亡起伏するが、階級の闘争によつて階級が生滅交替し、封建的貴族倒れて資本家現はれ、資本家に代つて勞働者が現



れるといふ類である。この意味に於て、國民主義と社會主義とは同じことを別の方面からなし、平和よりも戦争に、協調よりも闘争に走るものである。現時の人間は人類的となり文化的となつて居るから、徐々として野蠻なる集團闘争に眼を反けるようになりマルクスの所謂世界の労働者よ團結せよのかけ聲も平和と協調の前には何の感興をも與へざにいたるであらう。現代人は未だ原始社會以來の繼續として闘争を維れる事として居る。闘争は無論集團を基準とするが、集團は融合によつて漸次その範圍を増大した。家族から部落へ、部落より小なる國家へ、それより大なる國家へと擴大した。現に發達しつゝあるが如く、人生の生活が世界大となり、世界的機構をもつていたれば、最早、闘争の相手がなくなるから、平和の氣分は漸次導入確立するであらう。集團的對立はその最も少なるものより、その最も大なるにいたるまで闘争を本質とするのである。これ、集團時期に於ける現代に於て、悲惨にして殘忍なる闘争が諸々の名によつて行はれつゝある所以である。資本主義も、社會主義も、國民主義も、階級的排他的であり、何づれも集團本能に淵源するから、現に見るが如く世界を不安と混亂と陥れて居るのである。マルキシズムは労働大衆解放の名の下に階級闘争をなし、世界をして不安と混亂

とに陥れ、不快なる紛擾の天地を開展しつゝある。國民主義も亦固有な美名の下に世界を不安と混亂とに陥れ、その極、世界大戰の勃發となつて、文明諸國を一樣に疲憊せしめた。如何なる名を以てするも、階級主義闘争主義の結果は諸國民階級の共倒れとなる。社會主義、資本主義、國民主義は同一の過誤に陥つて居るが、これ、現代の舞臺に登場する三の主役の演技によつて世界を苦めつつある所以である、ここ數年來、支那の共匪軍と官軍とのために殺されたものは三十九萬五千名に達するといふが、共産軍はソビエト政府をつくり、占領中毎日人民をまとめて慘酷の刑に處し、占領を肯ぜぬ全町民を虐殺せしもの二三あるといふ。平江、瀏江地方で、住民が共匪から殺され、首なし死體の山が築かれ、平江では五年前七十萬の人口があつたが現在二十四萬五千となり、瀏江では十七萬一千人が殺され、現在數千人しか殘存して居ないといふ。かくの如き殘忍なる世態は獨り支那の現状ではない。世界到るところ階級の名を以て、國家の名を以てこれに幾倍するような殘忍無道が隅から隅まで繰り返されて居る。現時の世界は實に不愉快で、喧嘩と闘争とに充ち、生甲斐ある世界とは思はれない。

民族自決は現時哀れな姿で登場した可憐な役者であるが、民族自決は階級主義と偏狭な國家



主義とに反對して、國際主義に基き世界の諸人民族を一視同一に取扱はんことを要求する。ここに、世界の平和が齎らざるゝ契機が包藏される。社會主義も資本主義も國民主義も等しく區劃の問題から離れて、世界諸國とその人民とに對し一視同仁の原則を確立しなければ、理想社會に一步を進むることはできない。

工業主義は國際主義に向ふ性質をもつて居る。一國の工業は他國の工業を豫想し、一國で生産される物質だけで自國民を養ひ支ふことはできねから、必ず他國と交易を行はなければならぬ。ここに有無相通じ、交驩し、提携し、聯合する機運を開くべく、かくて工業主義は偏狹なる國民主義を破る傾向をもつ。然るに、悪性なる人間は工業を平和のため世界人類の幸福のために用ゐずして、熱狂な國民主義にまで發達せしめ、一瞬の休みもなく國と國とを争はしめる。偏狹なる國民主義にあつては、國家は獨立なる經濟單位となり、他の經濟單位を侵略し、かくて自國のみ生存と繁榮とを目的する鬭争主義に極る。工業主義の雙生兒たる資本主義と社會主義とは國家主義と相呼應し現代を野蠻なる修羅の巷となし鬭争と不安とに充つる世界として開展した。いづれにしても、世界的見地と人類的立場とは打開されなければ平和の天地は實

現されぬ。歐洲大戰當時諸國の國民は偏狹な國民主義に墮し、世界を破滅に導き、今も尙、文明諸國の國民を一樣に、不景氣と經濟的困窮に苦めてゐる。これに對し、故ウキルソン大統領は國際聯盟案を提起し、兎に角 世界をしてこれを採用せしめた、但し、國際聯盟を以てするも、加入諸國が武力に訴へて野心を遂げうるような程度では、世界の平和を維持し、理想社會へ一步を進めることはできない。國際聯盟は關係諸國をまとめ、法に従はしむるような組織と實力とをもたなければならぬ。歐洲大戰後の光景を見ても、如何に偏狹なる國民主義より起つた戰爭の慘過が甚大であつたかを想はしむる。今後と雖も、ヨリ大規模な世界戰爭が勃發する可能が相も變らず國民的利己心、集團本能、集團外的態度によつて保證されて居る。國內無數の小集團の鬭争、國際間の鬭争は階級主義と國民主義の美名の下に文明諸國を地平線下に没せしむる危険を包藏してゐる。今後、急速、世界の諸人種は亡び去るのではないかといふ危険があるが、これはただ原始以來益々大規模となつた集團的鬭争にかかはり合つてゐる。集團的鬭争は種々異つた名稱の下に行なれてゐる。資本主義や社會主義は階級の名の下に、殊に、社會主義者は恰もそれが人類に對し無上の大慈悲でもあるが如く到るところ鬭争の喚叫を



あけて居る。國民主義は國家と國民との名の下に他國に對し悪口と喧嘩と嫌忌と排斥とを事としてゐる。かくの如き諸々の美名の下に行はれる殘忍無道なる集團鬭争が一過してからでなければ、人生の平和と幸福とは増進しないであらうし、また、理想社會に接近することもできないであらう。

將來の社會に於ては、何づれにしても、一方に自由、他方に組織を併せ具備しなければならぬであらう。自由のみでは現代の如く大規模で有機的機構をもつにいたりし社會に對し如何ともなすことができない。現時の工業社會は縱横無盡に交渉し關係する諸機關と諸機能とをもつ。かかる有機的構造にあつては、その中の一機關一機能にその他一切の機關機能を損傷せずして引き抜くことはできぬ。一國が有機的構造をもつのみならず、世界を通じて有機的構造は益々擴張するばかり。今日、他國を損傷することなくして、一國を取り除くことはできぬ。世界の有機的構造は戦争を減少し、或は不可能ならしむると考へたものがあつたが、これは世界の労働者よ團結せよが國民心理無視の獨斷であると同一の謬想であつた。世界は有機的に構成されるにいたつたけれども、それよりも國民主義の優勢である間は、世界の有機的構造は歐

洲大戦の場合の如く國民の偏狹な排外心によつて、わけもなく破壊されるであらう。世界の労働者が團結することは一見よりも容易ではない。一國內の労働者は同じ國民であるといふ點から、他國の労働者と團結するよりも、資本家と團結する方が容易である。ここに階級主義の偽らざる姿がある。世界の労働者を一階級としてまとめるよりも、一國の諸階級を一團としてまとめる方が容易である。ここに社會主義者の誤算があつた。

社會が聯帶的となり、それが益々有機的となるや、そこに、組織が入來した。組織なき有機體を考へることができぬ。如何に個人の自由が望ましいとしても、純粹個人の生存形式では如何ともなす能はず、策の施しようがない。社會に於ける個人の行爲は他の個人に關係し交渉し影響を及ぼすので、社會に於て乃至國家によつて統制を加へなければならぬやうになつた。個人が互に關係し交渉し、自他關係を及ぼし合へば、個人の我儘勝手は許さるべくもなく、ここに強制によつて統制する必要を感じらるるにいたる。個人の自由は工業主義的社會では幾分減縮しなければならぬ。ここに有機體内に於て個人の自由を犠牲にする問題が起る。工業有機社會では眞に獨自なる個人といふが如きものはない。いづれも、分業によつて他と協力しつつあ



り他を回顧しつつある。個人は分業によつて全體の生産過程中の一部分を擔當するに過ぎず、相依り相集つて生産をなす仕組みである。有機的社會に於ては、一方、個人の自由を喪失したけれども、社會的にも經濟的にも、社會の力によつて個人の自由は増大された。物質的には、從來のわづかに手から口への生活を離れ、餘暇も生じたので、これを精神的開拓に用ゐることができ、文化を進めることができるようになった。但し、全體としての自由は増大されたけれども、個人としての自由は減縮されたと言ふ方が正しからう。ラッセル氏はこれについて巧みなる比喩を用ひてかく云ふ、*This, also, is exactly paralleled by the difference between the cell of the human body and a collection of protozoa. The separate cells of the human body have far less freedom than a protozoon, since they are compelled to co-operate with the rest of the body or perish. But the body as a whole has more freedom than a protozoon, since it has more control over its environment, more delicate senses, and more elaborate habits by which to utilize the knowledge brought by the senses.* 然るにラッセル氏は個々の細胞の自由

よりも、全體の自由が増大する意を明かにしてゐる。個々のプロトゾアは最大の自由をもつけれども、これが他の細胞に結合すれば、他によつて制せられてそれだけ自由を失ふ。身體は全體として諸々の細胞に助けられて一層よく環境に適應する自由を確保するけれども、個々の細胞の自由はそれだけ失はれる。細胞の場合の如く、個人が個人として獨立する間は個人に最大な自由がある。然るに、個人が社會に結合すれば、個人は全體より制肘をうけ、それだけ個人の自由は減縮される。但し、社會はこれが爲め自由を増大する。

組織は人間生活に欠くことができない。それに向つて、多少個人の自由を犠牲にするありとも、個人が社會に入り込むはそれによつて個人の生存能力を増大せんがためである。この方向を極度に押し進むれば現に見るが如く、社會生活に偏傾して、個人の自由を全く失ふ結果となる。ここに、再び個人の自由を恢復する工夫がある。工業主義は全體として社會の自由を増大したが、個人の自由はこれが爲めに減縮した。工業社會では個人の自由が減縮された爲め、個人的感情に屬する藝術や科學的創造が失はれた。但し、分業によつて協同的に生産することとなつたから、餘暇を生じたが、この餘暇は集合的感情 (collective passion) に基く集合的行



動たる戦争や衛生事業や初等教育に大なる力を添へるにいたつた。個人的感情 (individual passion) が減縮した爲め、個性は後退し、一般的見本が繁昌するにいたつた。そこには第一號第二號といふような無意味な人間が現はれ、個性による眞の人間眞の人格が失はれた、この社會ではいづれの人間を見ても同じよつたもので、個性により趣味によつて他の個人から區別せられるといふようなものはなくなつた。現時の工業文明に現はるる人間なるものは何づれも他の同類と區別せらるゝを嫌ふ第一號第二號といふが如き非人格なものとなり、竟に、それは物それ自づからなり下つた。現代社會殊に工業の發達せし社會に藝術も、科學的創造も、愛情も榮へぬのはこれが爲めである。集合感情は戦争といふが如き集合的なものに向ふから國民主義と相まつて、集合感情は現代文明諸國を戦争の偏執狂にしてつた。

社會主義の社會に於ては集合的偏執狂は一層その程度を増大するに違ひない。そこでは、個人的感情は極度に減退するであらうから、眞の藝術、詩歌、科學、宗教、戀愛は全くその姿を隠すであらう。社會主義社會に於ては、ただ、集合的な藝術、集合的な科學、集合的な詩歌、集合的な宗教、集合的な戀愛といふが如き怪物が現はれるだけであらう。

工業主義社會や社會主義社會では内質的價值をもつ文化は産出せられぬであらう。集合的な感情によるものは、ただ社會の命令によつて造られる社會的産物でこれによつて個人的感情による個人的産物を造り出すことはできない。工業主義的社會や社會主義的社會では愛情や戀愛にひたり、森や山の美しさを飽かず眺めいることはできない。かくの如き個人的感情は集合的で器械的な社會主義社會に行はれうべしとは考へられない。現代の工業文明に於て夢みる詩歌の世界は無殘にも驅逐しつくされた。現代人は物の生産の外、能のない生産偏執狂で、一切の質を量に換算して、わづかに價値を知るといつたような低能振りである。生産、實用といふことが工業社會では最も重ぜられる。これ工業の發達旺んなる米國の一事が萬事、實用主義であり、個人的創造全く地を拂ひ、そこには集合的に他と同一ならんことを欲する最劣等な文明と人間生活とが現はれる所以である。米國人の生活は物質的で、實用主義的で、器械的で、貨幣萬能であり、没趣味、無藝術で、詩も歌も野も山も夕陽も戀も知らぬ國民である。工業主義は金があり、富んで居ても、非常に低い文化と人間生活とを生み出す。現代人は何づれも米國人を手本として經濟的行事につきて居り、實用主義で、人間の代りに物を措定する。もう直ぎに



京都の如き無限に美しい情景は掻き消されコンクリートで固めたアメリカ風の都市が之に代つて出現するであらう。震災後の東京や横濱は下等なアメリカ町として再生し、没趣味で實用向きで、詩も歌もない都となつた。日本人の趣味生活はもう我々限りだ。京都のやうな悠長な藝術的生活はもう直きに去つて行く。我々の子孫は我々の應接したやうな美しい詩的な生活にひたることはできない。アメリカ町の移轉したやうな實用向きなコンクリートで固めた都は何といふ厭ふべきものであらう。我國にも實用主義がようやく深入りしたところを以て見れば、最早、日本にも個人的感情は死し、集合的感情の世界が出現するのであらう。現代の工業文明はかゝる悲惨な結果を生むが、社會主義社會はこれよりも俗悪なものだとすれば、大衆が無意味に無自覺にかゝる器械的社會を追ひ求むるのは無残ではないか。社會主義社會では、集合的生產によつて物質的生活は今より幾倍豊富になるとしても、集合生活のため、個人的生活は貧弱を極めるに違ひない。

人間生活には組織を要し統制を要するとするも、これが爲め、個人的感情は滅失してはならぬ。森や、山や、神社佛閣や、ロマンスは毫も減退させてはならぬ。然らば、如何に社會本位の社會でなければならぬとするも、個人と個人生活と個人的感情とはあくまで保存しなくてはならぬ。個人と個人生活とは人間として生存するにあたり、どこまでも基本で、斷然、これに對し讓歩することはできぬ。個人と個人生活と自由とを讓歩するのは、人間を辭退し、人間生活を見棄つるに等しい。こゝに、個人とその自由とは必ず、保存しなければならぬ理由がある。

併し、原始社會以來、人間は個人として生存することができぬ約束をもつ。個人の仲間生活に入つたのはこれが爲めである。然らば仲間生活、社會本位、集合感情といふことも人間生活には欠くわけには行かない。一方、個人とその自由とのみを掲げて純粹個人主義的方針をとり、他方、社會とその自由とのみを見て純粹社會主義の方針を採るが、前代現代に個人主義、自由主義の繁昌を見、今正に社會主義を始めとする各種の社會本位主義の跋扈するを見る。兩者は各自の一面のみを見て他面を無視するものである。ここに個人と社會とを統合する思想と方案とが生れる。これに應じ、統合的原理による社會理論が現はれる。抽象的に言へば理想社會は統合的原理社會であらうとは略安全に豫測せられる。現時の國家も亦既に統合社會



の一種としての面影をもつ。いづれにしても、理想社会は個人的原理と社会的原理とを統合する統合的原理によるものであらう。

参考文献

1. 海野幸徳「社会政策概論」(未爐閣)
2. 海野幸徳「階級闘争の研究」(未爐閣)
3. Spengler, Untergang des Abendlandes.
4. Spranger, Lebensformen, 1921.
5. Beckerath, Der moderne Industrialismus, 1930.
6. F. Müller-Lyer, Der Sinn des Lebens und die Wissenschaft, 1922.
7. Lyer, Phasen der Kultur und Richtlinien des Fortschritts, 1922.
8. Russell, The Prospects of Industrial Civilization, 1923.

9. Ellewood, Man's Social Destiny, 1930.
10. Hobhouse, Social Development, 1924.



昭和六年九月一日印刷  
昭和六年九月五日發行

次の社會 (定價金貳圓)

著者 海野幸徳

發行者 東京市神田區三崎町二丁目一番地  
野澤廣

印刷者 東京市外西巢鴨町庚申塚三八三番地  
大門忠

發賣所 東京市神田區三崎町二ノ一  
赤爐閣書房  
電話九段一五四五 振替東京六二三八六



# 近刊豫告

海野幸徳著

## 貧乏と奴隸

四六版 四百五十頁  
定價二圓 送料十二錢

— 御待かねの貧困哲學は愈々近刊せらる —

- 一 なぜ貧乏なのか？ どうすれば貧乏たらざるを得るか？
- これ現代階級戦上の超驚級の問題であるが、未だ何人もこの問題について最後の解答を與へたものはない。本書にいたつて始めて秘庫を開く鍵は用意せられる。
- 一 經濟主義、唯物史觀、マルキシズムが果して貧乏を根絶するであらうか。これに向つて最後の檢討がなされた。
- 一 貧乏は個人現象か、社會現象か？
- 著者は貧乏の故に奴隸たるにあらず、奴隸たるが故に貧乏たりとなし、社會現象としての奴隸問題をめづつて筆陣を張れり。
- 一 貧乏と奴隸！ これ正に現代諸問題の集流するところであるが、諸君は果して本問題を披開する鍵を用意するや、紛糾錯綜する街頭の迷路に立つて思案する滿天下の讀書子諸賢のため茲に貧困哲學は提供せらる！

海野社會事業研究所長 龍谷大學文學部教授 海野幸徳著

## 閥の偶像

『街頭社會大觀』 第一卷

- 目次
- 一、閥の正體
  - 二、閥の心理
  - 三、學閥の偶像
  - 四、職業の爭奪
  - 五、社會的地位の分配
  - 六、二校舌・二重道徳
  - 七、社會的鬭爭
  - 八、其他！ 其他！！

曩に「階級鬭爭の研究」を發表し識者間に一大センセーションを捲き起せし著者は、更に同黨異伐の本據、現代階級鬭爭の癥たるあらゆる閥に對し、天下の國手を以て任ずる著者は、氏獨特のメスを揮ひ、其の正體を白晝に曝し、其の牙城を砲撃するに四十五冊の巨砲を以てす、爲に閥人の死屍至る處累々たる壯觀を呈す、之れ正に「大衆綜合哲學」第一卷として街頭に社會大觀を弄にす。初秋第一に手にすべき超驚級の文獻である。

四六判 四百五十頁函人  
背革總クロース金文字入  
定價 二圓三十錢  
送料 十二錢



海野幸徳著

# 社會政策概論

菊判四百八十頁  
背草金文字入  
總クローズ製  
函入美本  
定價二圓八十錢  
送料十八錢

- 次目
- 一自由への道
  - 二社會政策概論
  - 三社會政策の改良方法
  - 四社會主義概念
  - 五社會主義の改良方法
  - 六社會事業概念
  - 七社會事業の改良方法
  - 八社會改良の方法論
  - その他

著者は本書に於て始めて社會政策の方法論を發表せり。常に先生の主唱する個別的方法と、集團的方法とを統合する方法論は先生独自の學論であつて、曩にこれを貧民政策論に適用し多大の好評を博したが、本書は始めて統合的方法論として首尾一貫して發表したものであつて、これによつて確實に社會政策の基礎が据へられたのである。従來の社會政策論は此の基礎を欠く所謂無効論であつた。乞ふ本書によつて社會政策の基礎論を具備し社會政策をして独自の權威を恢復せしめよ！

海野社會事業研究所長  
龍谷大學文學部教授

海野幸徳著 最新刊

# 日本社會政策史論

四六版四百二十頁  
定價二圓  
送料十二錢

- 次目
- 一日本社會政策の起源
  - 二社會政策の系統的發展
  - 三都市社會事業
  - 四府縣社會事業
  - 五社會政策體系
  - 六宗派社會事業
  - 七社會政策の種別的發表
  - 八將來の社會政策・社會事業

著者は現今の社會政策、社會事業の發達を總覽し、微より細に入り、各都市、各府縣、各團體の社會事業、社會政策を一々細説批判す。關係者は著者の批判を見ざるべからず。研究家は著者によつて始めて披開されたる寶庫を利用せざるべからず。



海野幸徳著

# 階級闘争の研究

四六版四百四十頁  
金文字クロー  
ス製 函入  
定價 二圓  
送料 十二錢

—御待ちかねの名著出づ—

- 目 次
- 一 階級闘争
  - 二 階級の概念
  - 三 集團の分類
  - 四 戦 争
  - 五 革命と進化
  - 六 時期尙早の革命
  - 七 階級闘争の是非
  - 八 融和問題
  - その他

階級闘争は現代に於ける最大なる人類關心事也。この問題に對し如何なる態度をとるべきか、如何に解決すべきかを知らんと欲して渴望する滿天下の讀者は博大深奥なる研究家たる著者に聽かざるべからず。乞ふ披見して其論策を知れ!!



565  
323

6年10月5日

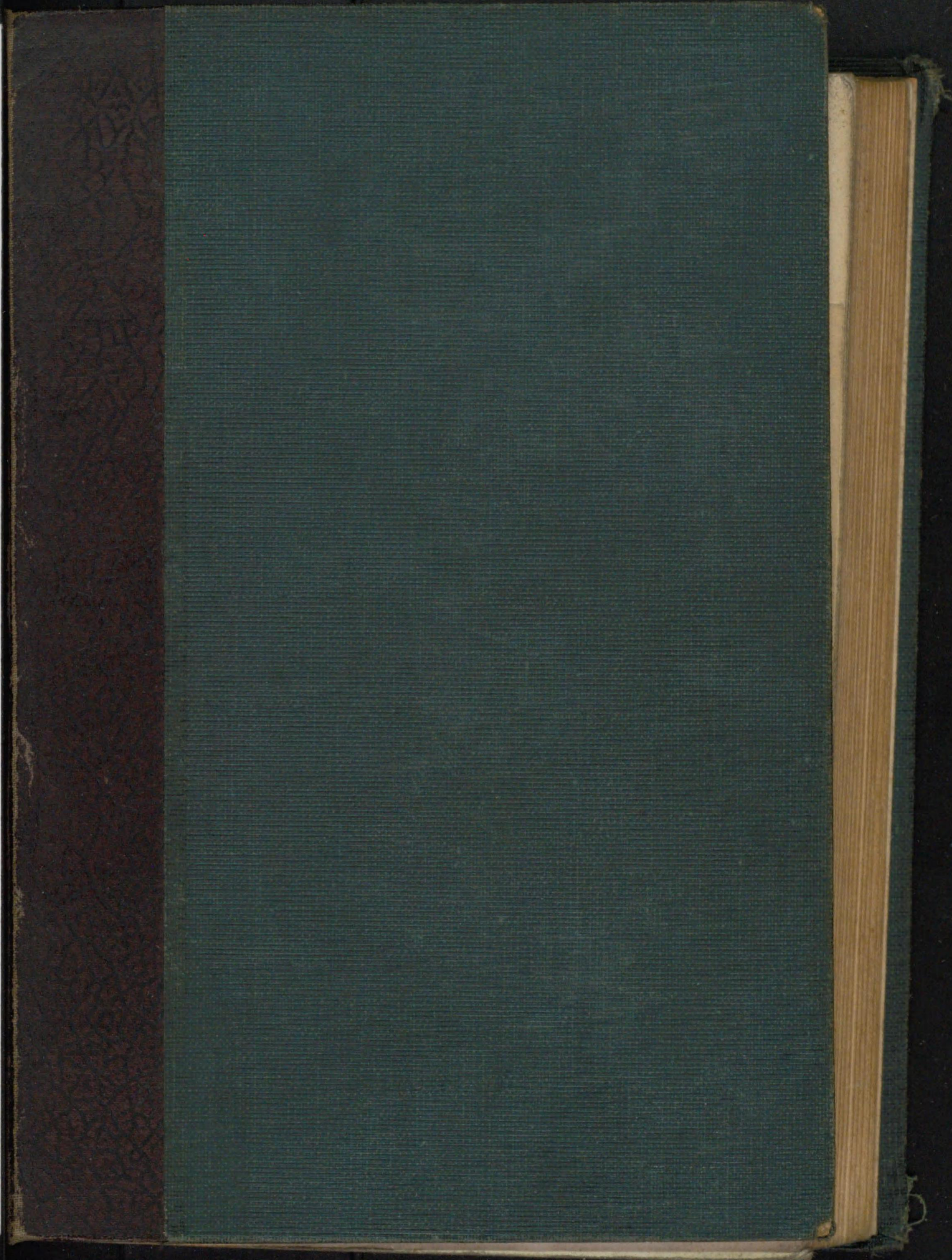
143

香	墨		墨	田					
田			香	田		田	田	山	
田	田					田	田	田	

下

二





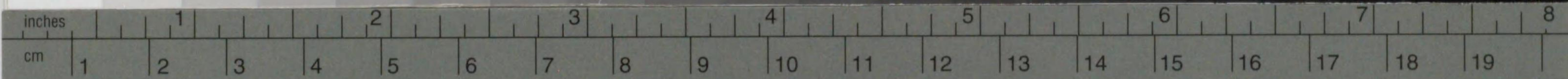


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

